

# 正本写『松の栄千代田の神徳』の周縁

山本和明

要旨 『松の栄千代田の神徳』は、仮名垣熊太郎を作者とする明治期正本写である。本作品を調査することによって、明治十年代の一時期に、なぜ正本写が流行したのか、その要因を考察する。



## 正本写の評判

明治期に一時流行した正本写は、なぜかすこぶる評判が悪い。舞台にかかった正本（脚本）を、舞台そのままに伝えるように、正本ぶりにて物語体書き直したものが正本写とされるが（本間久雄『新訂明治文学史』東京堂刊）、その評判はと言えば、例えば次のようなものであった。

○（正本写は）明治十年前後から、合巻物の復活につれて、再び世に行はれ、明治十四五年の頃には、相当に盛んになり、とも角も一つの文学形式として認めざるを得ないほどになった。但し、その多くは、その文章、文体から云つても、その意匠、挿画から云つても、発生当初のもの、例えば上に挙げた文政十一年刊の『杜若紫再咲』などとは比べものにならないほど低級卑俗のものとなり下つたことは否み得ない。作家としては、武田交來、久保田彦作、篠田仙果などがある。これらの作家の筆になつた「正本写」は、何れも黙阿弥の原作を、そのまゝに筋書風に書いたもので、芝居の開場と同時に、或ひは開場中、売出してゐるのが多い。

○かういふ筋書式な正本写の歓迎されたことは異常であつたらしく、このことは、例へば黙阿弥作で、例の延命院事件を作の中に取込んだ『日月星享和政談』が十一年の十月に新富座に上演された折などには、同じ題目の筋書式正本写が、一つは松邨漁夫に依り、一つは篠田仙果に依つて、原作上演と同時に、競争的に公けにされてゐることによつても窺ひ得るのである。これらの作は、再び云ふが、単なる筋書風のもので、文学的には何等価値のあるものではない。

○明治における正本写は所詮その頃の演劇研究の資料として、又は演劇台本と小説との交渉を考へる上での資料

として以外、作品として独立した価値を持つものではない。

(以上、本間氏前掲書)

こうした見解は、おそらく結論としては妥当なものだろう。しかし、それだけですべてを括って良いのだろうか。みるべき点がないとされながら、その一方で、正本写が「歓迎されたことは異常」であり、「競争的に公けにされてゐ」た状況にもあった訳で、ならば、その意味を問うことも必要ではないか。「歓迎され」つつも「何等価値のあるものではない」とされる、その要因を探ってみたいのである。今回の考察では、明治における正本写の中でも、「ルビ付の字になつた」魁(渥美清太郎「歌舞伎小説解題」早稲田文学二六一号)とされる錦栄堂版『松の栄千代田の神徳』(以後『松の栄』と表記)に着目し、作者や書肆などの問題を踏まえつつ、少し考えてみたい。

## 『松の栄』の作者

まず、『松の栄』について確認したい。

正本写『松の栄』は上中下三冊、版元は錦栄堂大倉孫兵衛。奥目録によれば、明治十一年六月五日に出版御届がなされている。この正本写は、新富座開場のために、二代目河竹新七(後の黙阿弥)が執筆した歌舞伎狂言「松栄千代田神徳」に関わるものであった。

明治十一年(一八七八)六月七・八日の二日間、政府高官臨席のもと、ガス燈のまばゆい光に照らし出された西洋建築新富座の開場式は、華々しくスタートを切った。狂言「松栄千代田神徳」は、その後を継いで、明治十一年六月十日から七月二十一日まで上演の、徳川家康の前半生のエピソードを綴った「活歴」であった。河竹繁俊の言葉(『日本演劇全史』)を借りるなら、「新史劇(活歴劇)で、上品というだけの、内容的には新らしさ面白さのないもの

だがすでに諸家の説くようにこの作品には少なくとも二つの意義があった」と言う。一つは依田学海や松田道之など文人学者が関与したこと、もう一つは時代考証にもとづく扮装・演技・演出をしたことである。「此脚本の作者は無論河竹新七なるが、依田学海翁が多少助言を与へたるは事実にして、日本の芝居で文人学者が直接嘴を容れたるは恐らくこれを以て嚆矢とすべし」（田村成義編『続々歌舞伎年代記』）と、近代歌舞伎の大きな転換点とも位置づけられる演目なのである。「その挿絵だけでも実に貴重な参考資料である」（渥美清太郎『歌舞伎大全』『歌舞伎小説』）正本写の中で、『松の榮』口絵「新富座劇場開業式ノ図」（上巻二丁裏・二丁表）などは、近代歌舞伎の始まりを告げるものとしてよく引き合いにだされている。<sup>1)</sup>

『松の榮』の作者は、仮名垣魯文の長男仮名垣熊太郎（奥目録には編輯人とある）。画師は蜂須賀国明。上巻には久保田彦作の序文が添えられている。熊太郎は、安政五年九月、魯文二十八歳の時に誕生。『仮名反古』に、「安政元年妻恋下に住む旗下酒井新三郎の妾某の妹にて名をおよしといふを媒介する者あるに任せ娶りて妻となせり（是れ亡長男熊太郎の実母なり）」とある。安政元年と言えば、魯文が湯島妻恋坂で表看板に「御詠案文認書 江戸作者 鈍亭魯文」と認め、門に掲げた時期である（野崎左文『私の見た明治文壇』『仮名垣魯文翁の自伝』）。実母およしは文久二年七月五日になくなってしまいが、それゆえ、魯文が何かにつけ熊太郎を溺愛したことは先学の指摘するところである。

『松の榮』の刊行された明治十一年当時、熊太郎はまだ二十一歳の若者にすぎない。当時の熊太郎の動向を、魯文の関与した「かなよみ新聞」から主に辿っておきたい。

明治十年三月五日、それまで編輯代理であった魯文は、第三百号より局長となった。と同時に「編輯兼印刷人」に熊太郎が名を連ねている。それは、第四〇二号（明治十年六月廿八日）に、伊藤専三が仮編輯長になるまで継続する。

伊藤専三が仮編輯長となつてから、熊太郎はというと、四九八号（明治十年九月廿六日）の謝罪記事中に「当新聞編輯長代理仮名垣熊太郎」とあり、編輯長代理の肩書きを持つこと明らかであろう。その行動面で、かなり粗忽な面があつたようで、明治十年十月十一日「かなよみ新聞」第四九一号謝罪広告に「又候豚児またろせがれの紙苦尻しくじり」といった表現を確認することが出来る。魯文はそうした息子を溺愛し、「私儀今般新富町六丁目二番地第五号仮名垣熊太郎方を休息所と相定候間休業日竝に朝暮とも当方に罷在候也 仮名垣魯文」（かなよみ新聞第五一二号、明治十年十一月四日）と熊太郎宅に行き来し、明治十年十一月二十八日創刊の『魯文珍報』（開珍社刊）では、社主を仮名垣魯文、編輯兼印刷同熊太郎でスタートさせている（八号以降は「編集人熊太郎・印刷長野田千秋」とし、明治十一年七月十六日刊の二〇号まで名を連ねている）。

熊太郎が本当に編輯等に携わつたか否かは定かではなく、例えば次の記載などがその実情を物語つてくれているのではない。以下は、「かなよみ新聞」五三四号（明治十年十二月三日）「仮名読珍聞」の項目「○編輯長坐附の告條久保田彦作拝稿」として掲載された文章である。

：巻頭の伊藤専三教育半送不動幕に局長（注―当時仮名垣魯文）と僕（注―彦作、当時編輯長兼印刷人）兩名殊更魯文珍報の出刷発兌た左右揮毫ゆゑ初日三日の稿本を放さず：

つまり、『魯文珍報』の実質の編輯は久保田彦作と魯文であり、熊太郎は名前ばかりの編輯人であつたということにならう。

編輯長こと久保田彦作は、『松の栄』に序文を記している。五代目尾上菊五郎が市村家橘と云つた頃、彦作はその附人作者となつて村子柑と号した。一時斯界を去り、明治六年頃、東京府学区取締を拜命し、府下小学校の建設に携つていたが、明治八年頃、黙阿弥の門下となり竹柴幸治（次）と称して狂言作者となつた。黙阿弥門下の四天王（三

世河竹新七、竹柴其水、竹柴繁造及び久保田彦作」とまで云われたが、中村雁次郎のために『箱根産雁皮玉章』を書いたばかりで、他に纏った脚本は一つも作らなかつたとされる。野崎左文によれば「此人は魯翁の純門人では無かつたかも知れぬが、魯文翁から引立てられた人」（『私の見た明治文壇』）との位置づけがなされ、「かなよみ新聞」のほか、明治十二年「歌舞伎新報」、のち明治十五年「時事新報」雑報記者ともなっている。「記者彦作が師弟の間だ」（『歌舞伎新報八五号、明治十三年七月七日』）と、黙阿弥との繋がりが今回よりも注目される。

『松の栄』のように歌舞伎を基とした正本写の場合、とりわけ劇界との繋がりを考えなくてはなるまい。その点でも久保田彦作が関与している可能性をあなたがち無視できないのである。

明治十一年六月前後では、「かなよみ新聞」六五八号及び六五九号（明治十一年五月八・九日）に仮名垣熊太郎編輯『会席真直妓猫』（開珍社発行）の広告が載り、今回の『松の栄』の御届が六月五日付である。表面上、熊太郎は、ほぼ一ヶ月の間に二冊もの本作りと精力的であり、更に『魯文珍報』の編輯と、形の上では多忙極まりない。実際には、先に挙げた彦作の文章に見るように、別人の手になるのであるが、どうやら魯文は、熊太郎を雑誌の編輯だけではなく単行本を執筆する作家へと画策していたらしい。

明治十一年六月九日「かなよみ新聞」六八七号記載によれば、「かなよみの編輯長（注―彦作）は以前河竹の門人なり。社長の悴（注―熊太郎）は新富町が住居の故か劇場に大層身が入つて」と、熊太郎は劇場へ入り浸っていた。しかし、後にも触れるが演劇の台本は一般の人間に見せないのが通例だから、本書の成立に若き熊太郎がどの程度関与していたのか、はなはだ疑わしい。

## 上演と出版

ところで、明治十一年六月十日から七月二十一日までの「松栄千代田神徳」上演で、「松の栄」はいつ頃出版されたのだろうか。奥付の明治十一年六月五日の御届のほかに手がかりを捜してみると、「かなよみ新聞」（明治十一年六月十二日）に次の広告が掲載される。

○松の栄千代田神徳 〈仮名垣熊太郎著／歌川国明画〉全三冊 皆さん兼々御待かねの新富座新築へ引移りの開業式を口画として序幕岡崎八幡の場より大詰迄文の廻しと画工の妙にて居ながら狂言を見る如く大切の石橋は外題にて御覧入極美本に仕立升たれば不相変御鼻貞を願ふ 十五日売出し 日本橋通り老丁目 萬屋孫兵衛敬白

この「十五日売出し」だが、十八日にも同広告が掲載されていることから順当に出版に至ったのだろう。即ち明治十一年六月十日より上演された「松栄千代田神徳」に関わる『松の栄』は、六月五日出版御届、六月十五日売り出しであったとして宜しかろう。つまり、出版御届時にはまだ上演されていないし、開演後六日目にして売り出したことになる。

それにしても刊行が早すぎないか。

活版摺りならいざしらず、『松の栄』は木版刷りである。しかも創作の話に掲載する草双紙ではなく、舞台と連動する正本写なのに、である。ひとまず『松の栄』刊行に至るまで、どのような経緯があるか、新聞記事を利用し確認しておく。

「読売新聞」に拠れば、明治十一年三月二十二日朝刊三面に「○新富座の本普請が出来あがると舞台開きに家康公



が江戸を開かれた時より三代將軍家光公までの事を狂言に仕組む」との記事が掲載された。これが早い記載に属する。暫く間隔を置いて、五月十二日朝刊に「○新富座はいよいよ本座にて近いうちに初日になり、狂言はかねて噂のあつた東照宮の一代記で、外題は「松栄千代田神徳」で」とあり、はじめて外題が明らかとなる。以後、五月十八日に役割が紙面に掲載され、六月一日に瓦斯燈の遅れから開業式が「多ぶん今月七日と八日の両日に成ましよう」と報じられる。六月三日に「新狂言の総ざらひ」をし、四日に「開業式の総ざらひ」を実施。そして開業式当日の六月七日になって、漸く狂言のあらましが示されているのである。ちなみに開業式の詳細は八日に「○昨日の新富座の開業式は夕刻済みましたから有増なら出せましたが委しく書たいから明日にいたします」とし、九日に詳述されている。

こうした「読売新聞」での取り上げ方に対し、演目の中身にかなり早い段階で触れているのが、魯文や彦作や熊太郎も関与していた「かなよみ新聞」記事である。新聞紙面上に演目の粗筋めいたものが掲載されたのも、「読売新聞」では六月七日であったのに対し、「かなよみ新聞」六七〇号（明治十一年五月二日）六七一号（五月二二日）とかなり早い時期に脚色書が掲載されている（六六九号にも掲載かと目されるが、復刻本欠号のため未見）。劇場から新聞社が招待され、観劇したのは六月十九日のことゆえ（かなよみ新聞六九六号〈六月二〇日〉に「昨日は新富座より招待に付東京大小の新聞社と雑誌局が西の棧敷で劇場見物が有ました弊社までも五厄介」とある）、五月段階での記事は、独自の取材の賜物なのだろう。六月二〇日からは「態々原稿をお送りですから本日より陸続見巧者連のお目に見ます」と「○新富座芝居評判記 六二連」掲載がスタートする。つまり見巧者による「芝居評判記」掲載以前に正本写「松の栄」は刊行されていることになる。

そもそも正本写は、上演舞台を伝える媒体とされてきた。役者の似顔を描き、舞台や小道具、衣裳に至るまで、実際の舞台を髣髴とさせるよう工夫が凝らされてきた。その話の概略が、ある程度新聞紙上でつかめるような状況の中

で、より舞台を想像させる絵入りの作品ゆえに、筋書きを記した正本写が歓迎されたであろうことは容易に想像できよう。事実、一時期流行をみたことは先学の指摘するところでもある。新聞という媒体が並行して紙面に情報を掲載していく以上、正本写が「まだ大当りのほとりのさめないうち<sup>(2)</sup>に急いで出版する」(渥美清太郎『歌舞伎大全』「歌舞伎小説」)媒体であるにしても、いやむしろそれ故にこそ、より詳細により正確に舞台内容を記すことが求められたはずである。しかし『松の栄』の場合、上演以前の出版御届である限り、その正確さは、果たしてどこに由来するのであろうか。

ちなみに山口武美『明治前期戯作本書目』(青裳堂)に従えば、明治八年の正本写、『天一坊大岡政談』(竹柴琴咲綴・栄久堂)は、出版許可(改印)が明治八年二月(亥二)だが、黙阿弥原作の「扇音同大岡政談」は明治八年一月二十八日より新富座で上演された。また同年『明治年間東日記』(笑門舎福来編・若栄堂)は明治八年八月出版許可(改印亥八)ながら、黙阿弥同名作は明治八年六月三日より既に新富座での上演である。共に上演開始から相応の間を要して届け出・刊行されている。

むしろ当時の慣例を併せ考えるなら、上演と出版との時間差も当然であった。

此狂言筋書記載の件は、御存知の通り演劇道の習慣にて作者の外は正本を他人に見するものならねど、弊社は座方並びに作者等へ内縁もあるに任せ、特別の訳にて正本の一覧を乞、その筋書を記すのにて、決して他へは漏まじと一図に思ふも世間知らず、何処でかちよろ任すもの、あるや、(略)是は芝居を傍聴筆記といふ様な事で刷出さる、かも知れねど、随分虫の能はなしなり。然し版權免許の素よりなきもの、真似をされてもお尻はやられず

〔歌舞伎新報〕一六〇号、明治十四年七月十七日)

新富座の筋書、此頃或新聞では一番目の筋から号を迫て記されるは、実にたまげた御探訪の行届き、一本正本は

警視庁へ御検閲に差出す外は、一切作者の手にありて他人へ渡さぬものなるを、其処を（中略）堂して其間にお手に入らる、か、真魁けに鼻毛をぬき御記載なさるはア、ら不思議と感心いたす外ぞなし。弊社杯では真正直に正本の写しを作者衆よりお廻し下さるを、一日千秋の思ひにて相待さへ、稽古中の繁用をアラ心なの新報社哉と毎度申さる、位なるに

（同四〇六号、明治十七年四月二十日）

『松の栄』の数年後、活版が主流をなした中での状況を示した一節である。それでも演劇の常として、正本を見る事が叶わなかつたならば、舞台の詳細を知ることが出来るのは、「特別の訳にて正本の一覽を乞」 「作者衆よりお廻し」あるか、稽古に立ち会うしか不可能だろう。つまり、通し稽古にせよ実際に観劇せずには、余程の事でもない限り内容を前もって知ることは出来ない。そのことは黙阿弥と親密な彦作といえど同様であつたに違いない。特に「松千代田神徳」のように、初めて上演されるものは尚更であつたろう。彦作による『松の栄』序文にもそうした背景が確認される。

大千世界は一大劇場。四季折々の廻り舞台。大陽分離の瓦斯の光りは。新富座の鉄管より輝き。開業の祝詞は向正面聳棧敷に伝話機の近く聞え。引幕の鉄線。電信に髻きもと髻にたり。二重廻しの鉄道は。拍子木のチョンに動止を自在にす。新らしい哉狂言の趣向は。毎日新聞の紙面の如し。その脚色すぢがきを傍聴の。洋筆べん隨意綴しゆゑ。長短誤脱も自かまたら。多いは例の一夜附。たゞ狂言を三保の浦。初日をまつまの発兌はこの編の栄を願ふと。楽隊代りに序言を奏す

五月にこの序文は記されている。「その脚色を傍聴の。洋筆隨意綴しゆゑ」との表現は、「写」すことの困難さを物語っている。五月段階では、彦作も関与する「かながき新聞」掲載の梗概程度の情報に恐らくとどまっていたのではないだろうか。<sup>(3)</sup>

出版御届日時が上演以前であること、並行して刊行されている「かなよみ新聞」に記された情報の程度、この二点

に加えて、本としての体裁にも注目したい。「松の栄」は、従来の正本写にはない漢字振り仮名の文によって表記されており、一丁あたりの情報量にも格段に違いをみせる。その造りも丁寧なものである。版木に彫ることなど、手間がかかることを考慮すれば、演劇が上演されてからでは、とても十五日発兌などに合うべくもない。恐らく相応に早い段階から準備が進められていたはずである。

### 競合からみえるもの

いま仮に、上演以前に準備されていたとすれば、判りやすい側面もある。

『松の栄』には「競争的に公けにされ」ている別の正本写がある。その本文と対比するに、幾つか問題となる箇所が浮上してきたのである。一・二指摘しておく。

まずその正本写だが、表題『松栄千代田神徳』上中下三冊で、作者は従前から正本写にたずさわってきた篠田仙果。絵師は、揚州周延。山松堂山村金三郎からの出版である。

問題となる刊行時期だが、上中下巻奥付に「編集者 篠田久治郎（神田仲町一丁目六番地）／出版人 山村金三郎（浅草上吉野町五十六番地）／明治十一年六月 日御届ケ」とあるだけで詳細は不明。発兌元の山松堂は、石川巖『明治初期戯作年表』によれば、明治十一年「【正本】松栄千代田神徳 三（仙果作／周延画）山松堂・【正本】西南雲晴朝東風 三（仙果作／周延画）山松堂」の二点、明治十二年に「【正本】綴合於伝仮名書 二（仙果作／周延画）山松堂・雪月花三遊新話 九（仙果／芳春画）山松堂」の二点の正本写の刊行が確認できる。

こうした別種の正本写の存在こそ、「競争的に公けにされてゐること」のあらわれであり、『松の栄』の刊行時期の

早さとも連動する問題のように思う。以下、両書の相違点について気づいた点を簡単に記しておくならば次のようにならうか。

○錦栄堂『松の栄』：役者似顔・漢字振り仮名付表記・演劇とのズレ多し（場面の省略・名前の相違・時には全く異なる表現・文字と絵の齟齬）・幕切れの符丁（チヨンくくく等）の存在・九「幕」構成

○山松堂『松栄千代田神徳』：稚拙役者似顔・ひらがな表記中心ルビ僅少（割書表示）・演劇にかなり忠実・幕切れの符丁なし・十四の「場」構成

山松堂版は従来からの正本写同様、ひらがなを中心とした表記で、一見稚拙に映る。しかし、実際のところ『松の栄』と山松堂『松栄千代田神徳』とを一瞥し、私的な感想が許されるならば、『松の栄』の方が、正直内容も繋がらずその出来も悪いように思えてならない。これが作者の力量差によるものかは定かではない。周縁の状況からみて熊太郎を作者とするには問題ありとした『松の栄』であったが、誰が作者であれ、上演舞台を覩ずに早い段階で準備していたならば、その作品としての出来不出来も、多くそのことに起因するのではないかとさえ思うのである。以下、具体的に気にかかった点を述べてみたい。

まず一例として。演劇「松栄千代田神徳」の中で最も趣向を凝らしたところに、三幕目「駿河三保松原夢の場」「同徳川家奥殿の場」における家康夢想の場面がある。天津乙女があらわれ、天女の持つ名玉を巡って、織田信長・明智光秀・木下藤吉郎らが互いに奪い合うが、遅れて登場した徳川家康が最後に取り得たという南柯の一夢であったが、夢から覚めた家康は、家来の夢解により天下を得る吉兆と解し、忠臣とともに宴となる場面である。元をただせば『漢楚軍談』卷之一「始皇巡狩して雲氣を望む」にある始皇帝が夢に見たという玉の故事に由来する。玉を巡ってのやりとりの類似性もさることながら、皇帝の命で長生不死の薬を求めた廬生が仙人から与えられた書『天録秘訣』

に書かれた隠し言の字義を李斯に釈かした点など、字謎を巡る展開も似通った場面である。「かなよみ新聞」六六九号にいち早くこの場面の脚色書が示されていたはずだが、残念ながら確認できていない（複製本欠号）。

いま『松の栄』から引用してみる。

（上巻九丁裏）：億川家泰、藤吉が持たる名玉終に取得て行過給ふを、両勇争ひ浪の音こだまにひゞく松風の操正しき億川の、栄えを爰に朝ぼらけ、是なん億川家泰公の南柯の一夢でありしとぞドロソソソ（中巻一丁表）そんなら今のは夢であつたか「御前お夢を御らうじましたか「ヲ、そちは作左か只今うつ、に見し夢はヲ、夫々床に掛たる夢窓国師の書たる讚は色則是空、夢は則ち空にして体なければと色則是天津乙女の降臨なり、殊にあれなる袋戸棚に画ける所も三保の景、彼名玉を小田明智羽柴と順に取得たるに不思議に後は我手に入しは、かへすく吉兆なるか「誠に夫は吉夢にムります、其玉こそ国家にたとへ後はかならず君の御手へ：

問題とすべきはこの夢解であろう。「夢は則ち空にして体なければと色則是天津乙女の降臨なり」とあるが、判つたようでわかりにくい表現である。この夢解から、なぜ家泰が天下人になるのか不鮮明この上ない。一方この場面、山松堂版『松栄千代田神徳』では、玉に「是」という文字があつたことから夢解が成されている。

（上巻八丁表）：おく川いゑやす公きのした藤きちらがもつたるたまをまたとりあげすかし見れば是「これ」といふ文「もん」じありくとほりつけあるにぞ、しはしかんがえ給ひたり。「おく川家しん所のば」おかぎきのごてんなるごしんじよにいゑやすこうしばしまどろみ給ひしが、おつきのまもり本田さくざゑもんごせんに手をつきひかえある、いゑやす公あたりを見て「われ日ごろこのめるところのらんぶのはごろもを見ておもはずもねぶりしゆめのところは三保のはまべにて是「これ」といふじをほりたるたまを手に入れしとみたり。：▲<sup>マ</sup>田ざくざゑもんひぎをすゝめ「これといふじは日の下の人をおんてににぎるずあさうにてよろこばしふぞんじたてまつ

り候ト申

では実際の上演はどうであったか。『黙阿弥全集』第二七卷（大正十五年・春陽堂）掲載正本より、参考までに呈示しておく。

春の日永のつれくくに、日頃好める謡ひ本、羽衣のくだりを暫く読む内、計らず眠りを催し、しばしまどろむ其間、心のつかれか見し夢は、是れなる襖に画きたる、処は駿河の三保ヶ浦、是といふ字をえり付けし、床に掛けたる色即是空空則是色、これといふ字を寄せたるも、夢想国師の名にさへちなめるものなるか、ハテ不思議な事を見るものぢやなアト思入：（略）本多 ム、此の上もなき吉夢にござります。／家康 取留もなく見し夢を何を証拠に吉夢とは／本多 是といふ字を三つに割れば、日の下の人とよむ。／家康 何と申す。／本多 先に光秀信長が、奪ひし玉を猿賢くも秀吉が、取りしを御前が又々手に入れしは、やがて、（ト手を開きて一緒に寄せ）四海も遠からず。（ト小声にて吞込ませる、家康ちつと笑みて）／家康 吉夢ぢやな。

つまり山松堂版が忠実に演劇を纏めあげ、的確に必要な情報を提示しているのに比して、『松の栄』では曖昧な形で演劇を踏襲していることになろう。このことは逆に、『松の栄』が「特別の訳にて正本の一覧を乞」「作者衆よりお廻し」あつて執筆されていないことを物語ってくれる。

もう一つ話題としたいのは、甲州の密使に対する命名のことである。意外なことに同じ演目を素材としながら『松の栄』と山松堂版『松栄千代田神徳』とは、同じ配役でも役名が全く異なっており、『松の栄』では「修験者玄敬」、山松堂版では「かうしうのまはしもの快典」とあり、挿絵にも「快」の字が刻まれている。<sup>(4)</sup>歌舞伎「松栄千代田神徳」は、『三河後風土記』の中からエピソードを抜粋し利用しているが、<sup>(5)</sup>そこでは「玄敬」で登場する。しかし、今日確認できる脚本（黙阿弥全集第二七卷）では「怪典」となっているのである。恐らく上演直前に何らかの事情で名前の

変更が行われたと考えるべきか。当時の別の媒体を確認するに、辻番付（国会図書館近代デジタルライブラリーによる）、役割番付（抱谷文庫蔵、資料館紙焼本による）で「修験者減敬」、絵本番付（蓬左文庫尾崎コレクション、資料館紙焼本による）で「快典」とこちらも齟齬をきたしている。ちなみに「読売新聞」明治十一年六月七日朝刊記事では「武田家の間者玄敬法師」とある。その先後関係については今は指摘に留めておくが（無論、快典を変更後と推定したいのだが）、そうした命名変更が直前にあったならば、競合する正本写の制作時期に違いをみることも許されるであろう。<sup>(6)</sup>上演に至る直前での様々な変更が周縁の媒体、例えば絵番付や正本写にまで波及していたのである。こうした競合作との違いは常に生じるわけではなく、直前における学者文人などの介入を許した本作ならではの希有な出来事なのかもしれないけれども。

## 書肆の戦略

今回の出版にあたった書肆は、『鳥追阿松海上新話』の版元として有名な錦栄堂大倉孫兵衛であった。『近世書林板元総覧』に「○万屋孫兵衛 万孫 玉明堂 錦栄堂 大倉氏 江戸通町一丁目一九（明治五年版画、十一年本）、茅場町一丁目 \*明治期に武田交来、久保田彦作の戯作も刊行する」とあり、江戸期以来の書肆と目されるが、「問屋名前帳」には確認できない。恐らく元々は双六・団扇絵などを扱う書肆であったのだろう。『東京書籍商組伝記集覧』「東京書籍商組員概歴」は、「大倉書店 東京市日本橋区通一丁目十九番地・創業 明治八年九月十五日」とし、その文中次のように記されている。

初代ハ孫兵衛ト称シ天保十四年四月八日江戸ニ生ル。父ノ絵双紙業及出版業ヲ継ギ錦栄堂、万屋ノ商号ヲ用フ。



明治二十二年以降二十四年迄東京書籍出版業者組合ノ委員ニ当選ス。明治二十二年絵双紙店ヲ廃シ洋紙店ヲ開始ス。明治三十五年十月書籍業ノ全部ヲ現主（注―大倉保五郎・二代目・安政四年五月四日生）ニ譲リ、同三十年小学校教科用図書ノ国定トナルヤ、文部省ノ許可ヲ得テ其翻刻発行者トナリ、四十二年迄継続ス。

したがって、『松の栄』刊行の書肆「大倉孫兵衛」は、初代孫兵衛（天保十四年四月八日生）の手により明治八年九月十五日創業の書肆となる。特に時代の変化に鋭敏であったようで、明治二十二年には大倉洋紙店を開き、別会社として大いに発展。その時から、書籍業は義弟保五郎に委ねていく（全面的に保五郎に譲った明治三十五年「大倉書店」と改称される）。国定教科書などの翻刻発行者も手がけ、『英和辞彙』、芳賀矢一改訂『言泉』、芳賀矢一編『日本人名辞典』を作るなど発展を遂げていった書肆でもある。ことに漱石「吾輩は猫である」の刊行書肆として夙に知られる。「明治二十二年絵双紙店」廃業とあるように、初代の手によって刊行されていたものは多く絵双紙類に属していたようである。

この明治二十二年までの刊行書物を辿る時、興味深いことに気づく。山口武美『明治前期戯作本書目』、石川巖『明治初期戯作年表』などで確認できる限りにおいて、創業以後、当初の『鹿兒島実記一夕話』（明治十年十二月六日届）『鳥追阿松海上新話』（明治十一年一月十八日御届）や、仮名垣魯文関・久保田彦作者『菊種延命袋』（明治十二年一月序）、『貞操節義古今名婦百首』（明治十四年十一月二十二日届）を除き、明治十六年までで、年二作以上、二十作以上にのぼる正本写を刊行し続けている。大倉は正本写を主に刊行していたのである。

この大倉に注目された研究に佐々木亨氏の「『鹿兒島実記一夕話』と『鳥追阿松海上新話』―大倉孫兵衛の戦略―」がある。正本写を主力商品にしていることは、氏が早く指摘するところである。その事由を佐々木氏は「大倉が題材を演劇に拠りかかるようになった背景」として、「つづきものの持つ大きな力を、未だ認識し得」ず、「安定を望んだ

大倉屋は、合巻以来の堅実な素材である演劇へ触手を伸ばしたのである」とする。「鳥追阿松海上新話」の成功を果たした書肆が正本写を中心に刊行していく背景について考えることは、当時の出版をめぐる問題を考える上でも重要なことであろう。今回、佐々木氏とは、今少し別のとらえ方を示してみたいと思う。

それは大きく次のように言えるのではないか。西南戦争・新聞連載という、いわば「即時性」の要するものに活路を見いだした大倉だが、その一方で、常に人々の興味をいざくような価値ある情報（ニュース性のあるもの）ばかりであるはずもなく、その刊行に至るフットワークの軽さを「正本写」の刊行、とりわけ上演時期からいち早く出版することに求めたのではないか。「正本写」は、従前から他の書肆（例えば栄久堂）により出版され、篠田仙果など専ら固定の作者が占めて執筆されてきた代物に他ならない。後から参入する新参の書肆にとっては何か目玉となることを必要とし、それが初めて参入した「松の栄」での、上演からのいち早き刊行などという大倉得意の戦略となった可能性をみたいのである。

検証作業を必要とするが、「明治前期戯作本書目」に掲げる「正本仕立ての草双紙」の出版書肆を見る限りにおいても後発の大倉が実際に勢力を伸ばしていく。加えて、今回考察の『松の栄』は、正本写における漢字かな交じりルビ附の魁であるが（渥美清太郎「歌舞伎小説解題」）、大倉こそが漢字振り仮名付きのいわゆる「明治式合巻」を生み出した「鳥追阿松海上新話」と同じ刊行書肆であることに注目して良いだろう。以後、正本写は、他の書肆刊行のものも、多くルビ付に変わっていく。大倉は、刊行においても様式においてもインパクトを与えたわけで、『松の栄』刊行が一つの契機となったことは間違いない。一例として、明治十一年十月十五日より新富座上演「日月星享和政談」の具足屋版本写（同題、十月十日御届）は、篠田仙果綴るところであるが、他書肆ながら、漢字振り仮名付きになっ

しかし、ここまで確認したように、少なくとも『松の栄』などは、実際の上演との差が著しいものとなっている。正本写でありながら、そうなりえていない点も多く、演劇そのままから乖離していた。正本「写」にも、その程度に軽重のあることを思わずにはいられない。

正本写が明治期演劇を理解する補助資料としての役割を果たしてきている中で、本稿当初に近代歌舞伎の始まりを告げるものとした口絵「新富座劇場開業式ノ図」なども、実を云えば、刊行までの早さを求めるために、実際の開演式を描いたものとは言えないのかもしれない。<sup>8)</sup>上演前の段階で作成である限り、演劇そのものとの間に違いが生じることは認めざるをえないのである。

のんく歳々相変らぬ。新富座の春狂言。ことしも何か新作を。一日の統講釈。彼河竹が立よみに弁じかけたる伊賀越を。聞かぢりにして綴りしは。歌舞伎を種のほんの脚色書

明治十三年三月に大倉から刊行された正本写『日本晴伊賀報讐』に記された作者武田交来序からの抜萃である。「立ちよみに」「聞かぢりにして綴」というそのあり方は、『松の栄』も同じであったろう。果たして歌舞伎の脚本との間にどれ程の差があるのか、程度の差こそあれ、文字通りの「正本写」とは言えない場合も想定していかねばなるまい。それでも読者に歓迎された。大倉の戦略はあたったのである。背景には、正本写にいち早く刊行のスピードを求めた観客の存在があるのだろうし、さらにいえば、内容の微妙な誤差は誤差として需要していった層、たとえば場面場面の断片的な情報の集積であったとしても受け入れてくれるような、極端に言えば演劇を観ずに本を買って購入層の存在をも意味しているのかもしれない。「各座に筋書の発行を見、また雑誌に筋書が掲載され、新聞にポツポツ脚本などが出るに及んで、これらは滅亡してしまつたのである」(『歌舞伎大全』)と渥美清太郎の云う衰退の期まで、こうした正本写が、大倉によって市場を席巻したのである。

[注]

(1) 山崎麓による先行研究から抜粋しておく。

△新富座の新築開場式

その新築開場式が明治十一年に行はれた時、これに因む草双紙が刊行されたのである。「松の栄千代田の神徳」(仮名垣熊太郎綴、蜂須賀国明画、錦栄堂大倉孫兵衛刊)である。(略)上巻の口絵は「新富座劇場開業式ノ図」であつて座元守田勘弥以下俳優一同怪しげなフロックコートみたいなボタンを五つきちんとはめた学生服にも似た洋服を着用して舞台にずらりとゐらんでゐる。団十郎が今しも祝文を朗読する所、向つて左側に岩井半四郎が鬘下地らしい頭で同じく男の洋服を着用してゐるのが一大奇観だ。

〔書物展望〕第十一卷・第七号「明治の草双紙から」

(2) 「芝居の開場と同時に、或ひは開場中、売出してゐるのが多い」と明治期の正本写について本間久雄は指摘しているが、概ね「松の栄」以降に、顕著にみるのが出来よう。

(3) 例えば依田学海『学海日録』の明治十一年五月廿二日条などをみても、学者により脚色の変更がなされたことが判る。

森田勘弥来りて戯場脚色の大略をのべ、余が刪正を請へり。この戯は栄松千代田の神徳と題す。東照公大高兵糧入のことを始とし、豊大閣に聚楽第に對面するに終れり。岡崎三郎信康自殺の事あり。藩翰譜を按ずるに、信康自殺のとき平岩親吉その伝たり。東照公を諫むるの事あり。この戯これをかきたり(山本註「欠きたり」)。余これを載せよといひき。また東照公の夫人関口氏は公に離絶せられしを、三郎これを岡崎城にかくまひおきたる事なるを、浜松城にあることとするなど、皆事実相違せり。皆これを改む。その他、義に害なき脚色は必しも改むるに及ばずといひき。

また田村成義編『続々歌舞伎年代記』には「稽古の時に、学海翁は松田府知事と俱に楽屋へ臨んで種々差図に及びたる事あり」との指摘もある。同書には他にも、旧幕臣市川熊男や松岡明義氏にも教えを乞ひ此劇の服装を案出したことなどが記されている。

(4) 具体的に本文を引用しておく。

○「松の栄」(中巻一丁表) 岡ざきの城内には億川の御台築山御前此程より御夫婦中睦しからず御子息信泰公のおやかたに別居し給ふ仮御殿、怪敷修弦を引とらへ鳥取半蔵出仕なす折から忍び入給ふ家泰公「其修弦こそ兼てより武田方の廻し者」：／(中巻四丁裏) 築山御殿見そなはし「ヲ、そちや湯殿の方か、そなたは此ほど懐妊とやらその男は誰じや」「ハイそれは「イヤ減多にはいへまい大方君のお胤であらう」「エ、「セアそうじやと白状しや」「イエく恥しながら相手は修験者玄

敬どの「そんな偽りは聞ぬ

○山松堂版『松栄千代田神徳』（中巻二丁表）：かかうしうのまはしもの快典「くわいてん」がきか、るあとよりお万のは、のおくろはこまかけ：／（中巻三丁表）入りちがへてほういんが「お方のきみに日ごろのねがひかなへてくれといただきつくを「そんなことはしらうわいなとふりはらつてもんに入るあと見おくつてくわいてんは「いゑやすのがついてみおゆゑに おれがいふこときかぬうへははらいせにつきやまごせんへふつこんでいろけよりよくのはうだトつぶやきくもんに入る

○演劇脚本（『黙阿弥全集』第二七巻より）

お万 あれ、誰でござんす、御常談なされますな。／怪典 誰でもない、怪典だく。／お万 エ、モ、修験の御身分でてんごうなさんすな。（略）／怪典 人我に辛ければ、我又人に辛しの譬、此意趣晴らしは大殿の、胤を宿せし事築山様へ申し入れ、ほえづらかわかし褒美の金。ト思入あつて、こりや、色気を捨て欲にいたさう。

- (5) 『三河後風土記』の中から用いられているのは次の章段である。「巻第七 大高城兵糧人の事／巻第十四 秀康御誕生附御母長勝院殿の事／巻第十六 三遠両国踊流行附永井伝八直勝の事／第十六 築山殿凶悍附信康君猛烈の事／第十六 信康君築山殿御生害附平岩親吉忠言の事／巻第十八 神君伊賀越御帰路の事／巻第二四 聚楽行幸用意の事／第二四 行幸附諸大名盟誓の事」。
- (6) 他にも錦絵表紙に描く衣裳などが明らかに異なる。『松の栄』錦絵表紙には、大切所作事「牡丹蝶扇彩」から、上巻は菊五郎、中巻は団十郎、下巻は左団次を配し、石橋物獅子の舞の一コマが描かれている。田村成義編『続々歌舞伎年代記』に「○大切の三人石橋は能衣装を用ひたるが頗る高価のものにて、金色目さむる計りにかゝりやき見物を驚ろかしめたり」と評される場面であり、周重等が描く錦絵組物が素材として描いており、その豪華さを伺い知ることが出来るのだが、『松の栄』表紙では全く異なった稽古着のような衣装となっている。

- (7) 山口武美「明治前期戯作本書目」をもとに、石川巖「明治初期戯作年表」、渥美清太郎「歌舞伎小説解題」により補う形で、錦栄堂大倉孫兵衛が正本写に参入した明治十一年以降、明治十六年までの東京新富座関連の正本写をリストアップしておく。明治十六年までとしたのは、以降に錦栄堂から正本写が刊行されたかは定かではないからである（明治二十年十月、錦栄堂から『三府五港写幻燈』が刊行されたが、口絵十図（周延）のあと活版刷本文のみの構成で正本写の合巻ではない。ちなみに渥美清太郎は明治二十一年刊『月梅薫臙夜』を「草双紙体歌舞伎小説の最後」とする。明治初期の戯作などはその所蔵先など不明なものも多く、まだ十全に原本の確認ができていない。そのため、本稿では踏査途上のひとまずの備忘録としておきたい。以下、マイクروفイッシュ版「明治期刊行物集成」（早稲田大学図書館編）で確認した場合、〔 〕内にフイッシュNoを他の場

合その所蔵先等を記している。

〔明治十一年〕

○「西南雲晴朝東風」篠田仙果編・山松堂。三月〇日御届（奥付）。周延画。中本、上中下巻三冊。正本写。黙阿弥原作、同年三月二十一日より新富座上演。〔03740〕

○「松榮千代田神徳」仮名垣熊太郎編・錦栄堂大倉孫兵衛。六月五日出版御届。久保田彦作序、国明画。中本、上中下巻三冊。正本写。黙阿弥原作、同年六月十日より新富座上演。〔本館蔵〕

※「松榮千代田神徳」篠田仙果録・山松堂。六月出版御届。周延画。中本、上中下巻三冊。正本写。〔禾口庵文庫〕

○「日月星享和政談」松邨漁夫編・錦栄堂大倉孫兵衛。出版御届十月十五日（奥付）。「戊寅秋 松村漁夫記」（序）。国政画。中本、上中下巻三冊。正本写。黙阿弥作、同年十月十五日より新富座上演。〔03684〕

※「日月星享和政談」篠田仙果綴・具足屋。十月十〇日出版御届。周延画。中本、上中下巻三冊。正本写。〔禾口庵文庫〕

○「劇場正本仮名手本忠臣蔵」松邨漁夫録・錦栄堂大倉孫兵衛。十一月出版御届。周延画。中本、上中下巻三冊。正本写。同年十一月二十七日より新富座上演。〔未見〕

〔明治十二年〕

○「碁太平記白石嘶・増補桃山譚・心中天網島」武田交来録・錦栄堂大倉孫兵衛。一月十五日出版。国政画。諸家の序句。中本、上中下巻三冊。正本写。〔未見〕

○「赤松満祐梅白簀」武田交来編・錦栄堂大倉孫兵衛。御届明治十二年〇月〇日、明治十二稔十二月（序）。周延画。中本、上中下巻三冊。正本写。二月二十八日より新富座上演。〔03673〕

○「綴合於伝仮名書」武田交来編・錦栄堂大倉孫兵衛。序文末尾年付、五月。国政画。中本、上中下巻三冊。正本写。黙阿弥原作、五月二十九日より新富座上演。〔本館蔵〕

※「綴合於伝仮名書」篠田仙果編・山松堂。明治十二年臯月下旬（序）、明治十二年五月〇日御届（奥付）。風来山人序、周延画。中本、上中下巻三冊。正本写。〔03686〕

○「花洛中山城名所」武田交来編・錦栄堂大倉孫兵衛。上巻見返しに「当る狂言戯場新話」とある。明治十二年八月（序）、出版御届明治十二年〇月〇日（奥付）。国政画。中本、上下巻二冊。正本写。黙阿弥原作、五月二十九日より新富座上演。

〔03676〕

- 「鏡山艶葉」武田交来編・錦栄堂大倉孫兵衛。同年出版。序文末尾の年付、十月。国政画。中本、上中下巻三冊。正本写。黙阿弥原作、十月二十九日より新富座上演。〔未見〕  
〔明治十三年〕
- 「日本晴伊賀報讐」武田交来録・錦栄堂大倉孫兵衛。(三月御届)。国政画。中本、上中下巻三冊。正本写。黙阿弥原作、三月十二日より新富座上演。〔禾口庵文庫〕
- 「星月夜見聞実記・霜夜鐘十字辻笠」松阿交来綴・錦栄堂大倉孫兵衛。見返しには「星月夜見聞実記」とある。明治十三年六月(序)。国政画。中本、上中下巻三冊。正本写。黙阿弥原作、六月十五日より新富座上演。〔05286〕
- ※「霜夜鐘十字辻笠」河竹其水作・歌舞伎新報社。六月十一日出版御届。猫々道人序詞、芳幾画。半紙本、五編五冊。脚本。〔03802〕
- ※「霜夜鐘十字辻笠」武田交来録・錦寿堂。明治十三年夏(初編序)。御届九月十三日(奥付)。交来序、芳年画。中本、五編十五冊。合巻。〔03801〕
- 「茶臼山凱歌陣立・木間屋箱根鹿笛」武田交来録・錦栄堂大倉孫兵衛。御届明治十三年十月□日(袋)。国政画。中本、上中下巻三冊。正本写。黙阿弥原作、十一月六日新富座上演。〔06987〕  
〔明治十四年〕
- 「松梅雪花三吉野」武田交来編・錦栄堂大倉孫兵衛。同年出版。国政画。中本、上下巻二冊。正本写。一月十二日より新富座上演。〔未見〕
- 「天衣紛上野初花・千代誉松山美譚」山閑人交来綴・錦栄堂大倉孫兵衛。明治十四年三月(序)。同年四月七日いろは新聞広告。国政画。中本、上中下巻三冊。正本写。黙阿弥原作、三月三十一日より新富座上演。〔06988〕
- 「世響太鼓功・魁源平躑躅」武田勝治郎編・錦栄堂大倉孫兵衛。五月二十二日御届。竹内栄久〔国政〕画。中本一冊。正本写。五月、市村座上演。〔未見〕
- 「夜討曾我狩場曙・古代形新染浴衣」武田交来綴・錦栄堂大倉孫兵衛。同年出版。序に「あやめも分ぬ五月雨の御徒然のお伽草紙」とある。見返しに「新富座新狂言」。国政画。中本、上中下巻三冊。正本写。黙阿弥原作、三月三十一日より新富座上演。〔05591〕
- ※「夜討曾我狩場曙」渡辺文京著・亀遊堂。七月八日出版御届。国峯画。中本、上下巻二冊。正本写。黙阿弥原作、六月

二十九日より新富座上演。(未見)

○「復咲後白梅・島衛月白浪」武田交来録・錦栄堂大倉孫兵衛。明治十四年十一月序。周延画。中本、上中下巻三冊。見返し上巻「かへり咲後日の梅」、中・下巻は「新富座当狂言」。正本写。黙阿弥原作、十一月二十日より新富座上演。(20662)〔明治十五年〕

○「川中島東都錦絵・切籠形京都紅染」武田交来編・錦栄堂大倉孫兵衛。自序末尾の年付、明治十五年初夏。周延画。中本、上中下巻三冊。正本写。黙阿弥原作、六月十一日より新富座上演。(未見)

※「川中島東都錦絵・望月・切籠形京都紅染」司馬鳳寿編・松応堂。明治十五年六月十五日御届(中巻奥付)。周重画。中本、上中下巻三冊。正本写。黙阿弥原作、六月十一日より新富座上演。(06389)

○「黒白論織分博多・色成楓夕栄・朝鮮種偽簪」梅素薫編・錦栄堂大倉孫兵衛。十月二十五日出版御届。周延画。中本、上中下巻三冊。正本写。黙阿弥原作、十一月八日より新富座上演。(未見)〔明治十六年〕

○「芽出柳緑翠松前」梅素薫編・錦栄堂大倉孫兵衛。同年出版。周延画。中本、上下巻二冊。正本写。黙阿弥原作、一月二十七日より新富座上演。(未見)

○「石魂録春高麗菊・金看板侠客本店」梅素薫綴・錦栄堂大倉孫兵衛。同年出版。周延画。中本、上中下巻三冊。正本写。黙阿弥原作、四月二十三日より新富座上演。(06933)

○「妹背山婦女庭訓」梅素薫録・錦栄堂大倉孫兵衛。十月三日出版御届。周延画。中本、上中下巻三冊。正本写。妹背山女庭訓、神靈矢口渡と黙阿弥原作千種花音頭新唄の脚本を綴る。十月二十三日より新富座上演。(未見)

(8) 例えば伊原青々園『明治演劇史』には「舞台着席順序」が示されているが、『松の栄』口絵の人物配置とは大きく異なっている。

#### 〔補記〕

本稿は当館研究プロジェクト「開化期戯作の社会史研究」、ならびに科学研究費補助金基盤研究(B)「原典資料の調査を基礎とした仮名垣魯文の著述活動に関する総合的研究」に基づく研究成果の一部であり、プロジェクト研究例会(二〇〇五年六月十五日、於国文学研究資料館)での口頭発表の一部を礎稿としている。なお『松の栄』は当館蔵本(請求番号ハ4-24。リプリント日本近代文学で影印刊行予定)、山松堂版は禾口庵文庫蔵本を用いた。